

授業改善と子供たちの様子

— 第5学年 ボール運動「つないで、つないで、がんバレー」の学習を終えて —

今回の授業づくりを通して目指した「子供の姿」

- 自ら課題を見付けている。課題の解決方法を考え、解決に向けて何度も繰り返し取り組んでいる。
- 課題解決のために互いの動きを見合っている。自己や仲間の考えたこと、見付けたことや分かったことなど他者に伝えている。
- できなかったことができるようになる。自分やチームの高まりを実感している。それぞれの運動の特性を味わっている。

研究協議会を経て改善したこと

- ◇単元の中で、児童に任せる場面を意図的に多くすることで、ゲーム時間を長く確保した。
- ◇感覚づくりの運動時に、チーム内での声掛けを多くするように指導を行った。
- ◇チームの作戦と個人の課題のずれが生じないように、作戦に対して自分自身がどう動くのかについてチーム内で共有するようにした。
- ◇単元の終末には「何ができるようになったのか」を振り返れるようにすることで、自分の高まりを実感できるようにした。

改善後の子供たちの姿

- ◎単元の最後には、ゲームまでの時間やゲーム間の話合いの時間に関しても集合せずに子供の主体性に任せたことで、チームごとに話合いを行ったり、練習に使ったりするなど、工夫して時間を活用することができていた。
- ◎がんバレーワードに立ち戻り、掲示を意識させたことによって、チーム内の声掛けが増えていった。
- ◎チームの作戦を達成するために個人が何をするのかを考えさせたことで、チーム内での話合いの視点が明確になったり、振り返りがしやすくなったりしていた。
- ◎「何ができるようになったのか」を振り返らせることで、技能面での高まりだけでなく、「協力することができた」「友達にアドバイスをを行うことができた」など、学習の仕方や情緒的な面からも高まりを実感することができている子供が多かった。

授業者の振り返り <第5学年3組担任>

- きょうだいチームで学習を行うことで、アドバイスをを行う必然性が生まれ、具体的なアドバイスや肯定的な声掛けが自然と増えていくことを学んだ。
- 単元の後半でリーグ戦ではなく、対抗戦を取り入れることで、実力が拮抗したチームと1単位時間の中で2回対戦できる。そうすることで、作戦を立てる必然性やアドバイスをする意義が生まれることを学んだ。
- 授業の中での教師の言葉掛けは、指導をするだけでなく、話合いを活性化させることが大切であることを学んだ。そのためには、教師自身が各チームの課題を把握しておく必要がある。